

バラをより多くの人へ

産業を支える苗栽培

ます
い
榊井のりゆき
紀行

(41歳)

吉野郡下市町

流行に比べられるよう
約1000種を揃える

大和ばら園の榊井紀行さんは、3代目となるバラ苗農家の担い手である。バラ苗を専門としている農園は、奈良県下では唯一といえる。約70aの圃場では、およそ1000種のバラを栽培しており、その数は1万株にもおよぶ。

「バラは安定して人気のある花ですが、常に新しい品種が生まれていますし、流行があるんです。最近は花卉が丸みを帯びた中輪系（カップ系）の少し小さなサ



イズのバラが人気なので、そうした品種を多く栽培しています」と榊井さん。最近、庭も小さくなり、あるいはペランダでガーデニングをする人も少ない。そのため、鉢でも栽培しやすい小さな品種が好まれるという。とはいえ、流行は変わり循環するものなので、流行が変わったときに対応できるよう、1株ずつでも保存している。そのため、栽培品種が多いのだとか。

バラ苗の主な出荷先は京阪園芸などの種苗会社だが、一部は実家近くに店舗を構え、直販を行っている。直販するのは鉢植えのバラなど。春には、多くのお客が訪れる。栽培のアドバイスを受けられ

ることもあり、お客さんからは好評だ。

「最初に買いにこられたときはまったくの素人だったのに、今ではオープンガーデンをしたり、バラのアーチを作ったりしている方もいます。バラを大切に育ててくれて、多くの方の目に触れるようになるのは、嬉しいことですね」と榊井さん。販売価格は1000～1500円を中心に、高いものでも3000円程度。品質が高く、栽培のアドバイスも聞けると、遠くから足を運ぶ客が多い。

手をかけるほど美しく
バラ苗栽培の魅力

バラ苗の栽培は、まず、台木となる野バラの栽培から始まる。この野バラも昔は専門に栽培する農家があったそうだが減少するばかりで、現在は自家栽培を行っている。いわゆる原種に近い品種で、これを11月頃に引き抜き、1～2月にか



けてそれぞれの品種の苗木を接木していく。接木した苗は4月に畑へ植え、秋にかけて育て、10月頃から順次出荷していく。年明け頃に最終

の出荷を終える

というのが年間
の主なスケジュールだ。

バラを栽培した畑は翌年、水田として米を栽培する。これは



あり、根の伸びがよくなるのだという。出荷商品はバラ苗のため、畑に植えた

のちに花が開くと、順次切り落とし、作業が欠かせない。これは花に栄養が行くのを防ぎ、苗が栄養を蓄えてしっかりと育つようにするため。父親の紀彦さんを含めた家族4人とパートタイマーのスタッフ2名による手作業で一連の作業を進めていく。繁忙期には、更にシルバースタッフを導入することもある。

「しっかりとした苗が育ったのを見ると、仕事の苦労が報われる思いがします。お客さまの手に渡って、きつときれいな花を咲かせてくれると思うと嬉しい。バラは品種ごとに性質が違うので、肥料の種類や与える量の調整、消毒のタイミングなどがバラバラです。とても手がかりますが、手をかけた分だけ結果に現れるので、やりがいがあります。少しでも美しいバラをより多くの方に愛んでもらえるように、続けていきたい」と榊井さんは言う。

品種開発も一つの喜び
長く愛されるバラへ

世界には3万以上のバラ品種があると言われるが、大和バラ園が開発したバラもある。ひとつは「ラムのつばき」といい、バラのソムリエとして有名な小山内健さんのプロデュースで、歌手の倅田来未さんがデビュー10周年を記念して命名した。ほかにも、『ポシエット』や『エトワール・エテルネル』など、5種ほどが流通している。

「バラの魅力は品種が豊富で、あらゆる色が楽しめることにあると思います。香りも個性的ですし、大きな花が咲いたときの感動も大きい。そんな中で、ロングセラーのバラ品種は、何百年と愛されていて、ずっと見続けていますが、やはり素晴らしい。自分たちが創った品種も長く愛されたら嬉しいですね」と榊井さんは未来へ視線を伸ばす。

市場で高評価を得る
今も盛んなバラ栽培

奈良県で特に切りバラの栽培が盛んなのは平群町だ。昭和40年代から切りバラの栽培が盛んに行われてきた。当時から、京阪神に近い立地条件をひとつのメリットに、大阪の市場で高い評価を得て順調に栽培面積と出荷量を伸ばしている。平成7年頃を境に全国的に生産の縮小がみられる中で、平群町の生産規模はほぼ維持されている。土耕からロックウール栽培の導入など、栽培技術の改良とともに、奈良県では輸送技術の改良に注力してきた。切りバラを新鮮なまま消費地に輸送する技術が発達したことが、奈良県産のバラが市場で高い評価を得るひとつの要因になっている。

